

昭
和
九
年
日
記

TAGEBUCH

VOL. 10.



13te FEBRUAR 1934

K. TANAKA

昭和九年

Hütze meine Liebe und mich
vor Hunger und Frost, o Gott!

Liebe ist vergänglich.
Hunger sei ewig!

竹玖~~玖~~百參拾肆年貳月拾參日

世亦方なく然しきこころを抱き

外濠通の傳馬船を見

冷き水を見てあしが

いっしか心は大いなる愛の上に移りんき

われは愛すべからぬことを思ふ

いとわれをかなしくしめ

われは飯を求めしがふと酷くこれを拒みたり

大いなる天より何をも降りまらぬその日々を飯

心と腹をいもじければいとんとまじらひ

われつなから満すことを信ぜず

たゞふとりのいとしよりて共ん泣きしが

かれはさへ権力し無かりき

たゞおれりして思ふらくは地二つに裂れ

われを生ませて埋めよと

ありいはわれら一匹の豺狼となり

笑むありて他人を嘲むのまねことを

かくてわれらとけ得ぬ世のまね重し

われは男をなれば外にありて悔らし

かれは女やをぬんありて涙き

一夜臥床に入りて人間の苦みをつしめ

(裾津見抄)

貳月拾肆日

ゆふくのいなると帰るいといの様に
わの魂はいつか性として汝の魂をたずめる

★
山腹に隠れや村々から挨拶が送られる
街は日食の忙しい

天文台は臨時に電車が出

新聞社では新しい社員が叱られてゐる

やせしは山腹の家へ帰りたい

老い長父母を慰める方法を一も

学校生活では教へてもらふが

★
青い花 (一) ギルトル・ハウアトマン

古い山の町は輝きと如ましく彼方へ拡かゝる。錯然と重々しくそこから
ニシカ
過去がひいて来る。そして微かにゆかまはくはギルトルの愛の
たいよつて来る。その時かの高木の葉の雪まじり空間は拡がらぬ
夕の鐘の音の響きをつけたれは魂は、かの山腹の
と、ラウレンの並木道へ立ちこやく。

花の雪まじり空間は拡がらぬ
夕の鐘の音の響きをつけたれは魂は、かの山腹の
と、ラウレンの並木道へ立ちこやく。

貳月拾七日

大層 百首

鴉か啼くと風か止み
花キヤへの閉ぢるをりかす
こ、やせしの脚下に地軸はまぢ
かたしを中ふらぬは、低くは月か降るこころ

湖水

水の申は影女の毛
かはほゆのせのやん黄金色で
昔この顔か湖水を流すた
絲物のかけから夕もやな立ち
こぼつれの申は影女の毛は、閃めいた

長い夜

わがし長ちの顔か、はるかに日なり
雲のまじつぱしからりせな降り
むかしむかしおちいさんとおはあさんあり
オルゴールに傳つて死を想つてゐる

サボネ

はよりのからせろまが立ち
柱そのいつて鳩か飛ぶ
破瓦から草十か芽ふき
死んか神々が嬉しうして
そのさいころをわらふか、私らしい

カリカラム

鳩はみまごの陸するから
水は流し出して
月夜は海へ潮となる
ササキは海へ水は
しやほしかとけなから
ま月くまのなつて行つた

貳月拾玖日

ある西鹿がな朝から
羊の似て雲が躍り
地上には若草の向と魚達の下る
ピアを弾く小鳥達に
木の毎々が約束され
市場には株が上りお書一十休閑がある

二月二十三日

池田野村手頃から

★
方々の梅の花の咲く午後を散歩して
何かおを悲ますのらう
わんは指を折る見るが指は是れなり
おけい指るは一つのそとと氣おこと
い雲は夏のやい直の北中を既と駆け行つた

二月二十五日

梅の花の咲く廿五日

まぢ枝のまの木々か入らまじり
髪の中のやん葉かひつかうてある
お世さんのやいな鶴か赤お
脚はちやぬい細い
冷たい映る影を欠るほいのし力もなき
彼は天を仰いで嘆く

三月五日

詩「西康省」を書く、十枚、一九〇行
ゆき子留守の問へ来り

三月十五日

もんげや辛夷の花の間へ
若ひた春はさまふみ
散つた花のうらを踏むはるかある

★
雨か過るを後には木々は皆のいし
一頁を呼ぶ歌かこびます
山峡から鮎かサシて来り

★
う田一の卯か海は深まにあつた
口わつくとまのやうに飲こむつかり
縋ると流れる潮よ
かみ春の愁をこめぬま

★
おとこはこれには三毛はしい風で来
吹りは馬を以て中絶し
昔の色いし花か咲き
鳥の来鳴く廿敷の家を羨し
雨の中いそぐと舞ふより

★
かかりせニエを聞く人になら
口笛のまひに咳がまざり
静かなる屋敷町の書から
おんモン時計が拂はれる
ラムポやぬの模形エヤ
おのの花の中はニエはさ月す
梢から空に向つて降すこんで行く
われは土を荷負て
湧つほい土のたいつタニシのちある

★
ゆきの名をよめるやせぬ
われは幾多の負債を得
吟詠として深夜をやり
生ぬるい風の鳴りし
溝毎に唾を吐いてゐる
安うかん眠るやせと思ふたか
いつかやせをゆくそとやめみち

三月二十五日 大層で

七日のハラカシラウツ
帷を垂れた穴の下で
ヨトナチは深んて雷のやう
坂を降りてゆくのは馬
裸の身の汗ばんでるのだ

★ 驛遮馬車の唸りは遠い
木林ではおぼろり、水仙の花が道に
欽長の声かこえて聞え
蒼白な詩人たちの椅子が動く
松陰の手が一面の厚さ
もしすくぬきかたをこしす

★ 明日はイマアツに
フロラとアラレエフトラの双生児
たふりと愛をいし見たち
蹄をうたげ、木林を
川からは水精

アツマカノ
サヤノナカヤマ
ナカナカニ
アビミシヒトノ
カゲゾコヒレキ
アビミテノ
ノチノコロロニ
クラブレバ
ムカレム
モノヲオモハカリケリ
フルサトノ
ヨベノフスマニ
トヒケルム
アビミシコロノ
カヤサヤノオト

三月三十一日

西川を送る

池田、牛島、安田
さきよ、八木

三月二十六日 西川池田安田

三月二十七日 清徳(浪中) 田村卯

三月二十八日 合岡、山本、磯元

三月三十日 佐保、光岡

あゝ(噴咽)の奥まで見せつけ、雲を馬を放ちたい
この夜更を放つ大都会をよましの
原色をもつて色彩する妙を得た、
底土から湧き出たオナタレ瓦斯の泡は、
叫ぶ声にまじり、言葉がまはつてくる

★ 木肉の唇の息子西日は三月一日、死んだと云ふ
★ このノートは振り出し物である

噴き上げは緑の若草を埋れ
大理石のウチナスは無花果の露、うしろ
黄金の陽の矢は果樹のこぼれ
馬車は坂道を駆け上り
口曲がるとはく、林をゆくかせ
村々は煙火、さくらさき
そこのうしろ、エダの上、枝をよさす
泥の中、手ははまわらう
お屋敷で十の曲をマールカ、舞ははんである。

Des fleurs s'envola un papillon qui me
frôla le menton de ses ailes, j'en eus telle
frayeur que j'ai crié.

Belle compagne Blanche fleur, voulez-vous
voir une fleur que vous aimez beaucoup,
je le sais, lorsque vous la verrez. Il n'y
a pas de fleurs pareilles dans ce pays.

Venez-y, dit Clarisse, vous la connaîtrez cer-
tainement, car elle est de votre pays; je vous
la donnerai si vous la voulez.

四月廿六

大まよと 松田明

夕方の山は赤茶けてゐる

アヒの群れ陰気くさい 腹の子はささめ

寒風を合ふる雲のまき

おはちさん達が一羽 懐病のこり

女を先んずば 靴下をほころばす

イコマのヤマの夕ぐれ、かま

すつちは西のこもれいがかねへてゐた

★

彼のせいで白梅、紅梅、沈丁、ササ、サヤの花

彼のうまいはめいし見

そのまう口の中まじい 義母

そのまじい 義父

一團りの義兄弟たち

彼の家の外を寒風が吹く

彼は煙草を吸ひ出す

家の内と外と

彼。だまう濃く、おまじい、さうする。

春の寒や哀の子に甘んずるわがこゝろ

馬酔木をくぐり、原をまはして、

寒ければこの平野ははら見ざる来ぬ

老婦のこゝろ、自ずから、ささめ、氷空を、

春の日記

二月十八日

春めくや人さまくの伊勢参り

桜する中馬さかく連れ

山霞の月一峰、山館立て

鐘の火のあたる

鳥居より半道、園の砂行て

花の長男の紙、鳥あいる頃

柳の陰、さくら、輪をまき

入る、ゆるい、蝶、さくら、より

世にあらはゆる、海、年とりて

記念、いせ、山、嶽の、昔、畑

い、春を、花と、竹と、い、い、さ、しく

羊も、見、し、鳥、こ、り、い、ゆく

昌圭

重五

昌圭

昌圭

昌圭

昌圭

昌圭

昌圭

昌圭

昌圭

昌圭

昌圭

春の寒や哀の子に甘んずるわがこゝろ

馬酔木をくぐり、原をまはして、

寒ければこの平野ははら見ざる来ぬ

老婦のこゝろ、自ずから、ささめ、氷空を、

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

三月十八日 野水亭にて (春の日記)

春の寒や哀の子に甘んずるわがこゝろ

馬酔木をくぐり、原をまはして、

寒ければこの平野ははら見ざる来ぬ

老婦のこゝろ、自ずから、ささめ、氷空を、

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

夕飯の、さくら、さくら、さくら

四月九日

甘房屋のワカカヘテ大江の

採幽

櫻咲く溪谷をヤキ

石ころの河原を見

果物を食み

に鳥を敷く聞く

花菜葉は此の芽吹き

高の根木は思ひ

山角を曲ぐは瀬の音

山麓を水が流る

世の葉は尖り

たは月と大い

嶮岨を舟は渡る

松根を撫で

岩を傳つる流を過り

山麓の砂をよんで

出る山の上

雨あらしは風化し

海は和やかなる

帆は静かに滑る

や童は山の内を止す

予は坐りし坐し

草生まざる地味に

休む。薩の文をよみ

我春の若水汲み書きて

餅を喰つ、後を君か代

山は花散れず遊ぶ

目撃すおぼろ雲を鳴らす

三月十九日舟泉亭

山吹のあふき岨のくつ

蝶水のぬいかり岩

まさらや餅をす、へき

鯉の音水はうらぐ

花藤の花をいふ

炊るとついで

日野野 卷一

薄しりけのく女はの林

草を海し 花の後の思

口菜を結はすを割る

なまて鶴をたつあとの

おけほのや 鳥をま

蝶鳥を待つこけし

蝶の釣瓶をあかる

幅端のみある、月

いこくと見ええ

わの女しと馬は

ほろろく、土

行く蝶のと

はかしや 蝶の

松切の山吹

山吹の

白片落梅

水鳥のはし

春をさか

手をさし

機 の

信徳

友五

越人

伊相

百令

百令

合

合

合

合

合

合

合

合

合

合

合

合

合

合

合

合

合

合

合

越人

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

五月十日 大毎のあつまし

五月八日

私の辞の世界に私は赤い帽子を着る
色と目の検査はいいし今枯しが
暗かりに落ちたおる花束の色は知らなんだ
噂の道がそこにある

掘取った青い土から陶器をこぼす
穴工やく雲や鳥は水は影うつす
そこは自ら舞をたか(やう)い

これはノーマリスの翻譯者の創作力が消失しました

目まは彼等の制服に

夜は彼等のお怒りまん中

それは花ではありません
赤くて雄蕊があるけれど

ホー山頂より大雪山脈

岬やたる山際を

山嶺やたる峰々

こゝに吹へてはか、船の

肋骨の表りなごまかした

返りませう踊りませう

口どかちわけて蹄鉄の

形になったまをこりませう

本報は五月の暑線

地には若草 五月花

まじり子たちを踏まらば
たのしい拍子でよまらば
いつをあきらめませうから

返りませうとひまし

空は五月の澄み

もどししまはるばる

その上本報のやうい

春の果をとりえまにか

しうちき密かにしとせず

ま幸福なんこ正しくば
いんち聖者とてつけない

返りませう踊りませう

しうさうまから花びらは

春の樂隊百千鳥

調律試演のおまじや

返はハイネカ、まの歌

身は破れたまの歌

不才な歌をひませう

たいいことすからこ、さから

自分の歌をひませう

五月九日

私たちがはらぬし正確な機械の
一つとして時計を知らぬが、
それゆゑに人ごは
まじり子たちを踏まらば
たのしい拍子でよまらば
いつをあきらめませうから

子傳しといひよちつてはゆる
 金貨のやうな力い花か
 しつめい水い流れてゆく
 夕陽や。黙やの存在か明かでない。

ノブリス ?

W. ニュレーゲル

F. ニュレーゲル

ヘルデルリン

テイーク

レエリク

★ ニュムフ

此等いろの光の中

男は額を濡してゐる

水は黄色い甘味か味い

日はさす午

木の洞から流れる光か

甘き生い魚の皮のやう

男はまた寝てあやむい

水い動まい

アイハントルフ

アイハントルフ

カリム兄弟

アルニム・アヒム

アリエターノ

ハイネ

シュトルム

レナウ

北川冬彦

北園克衛

春山行夫

三好達治

阪手越郎

上田敏雄

安西冬衛

西原三郎

五月十日

うすい血の色の林のなかで

小鳥は啼きまはりにまきしてゐる

雲は軽やかになるニヤウと動かし

時々口笛を吹く

自由な水が流れては

インクのように染まつてしまふ

★

従軍する山をいまといつたカミヤ科の植物

去来する獵科の鳥

★

月、無いつい水あう這り上つて

他虫類は啼きまくいたましく

おのおの知つてゐる操歌のかたむすを

としと首をはいつて寝る

としと死に至らぬ非行かたむすを

★ 天狗

る合その夜後に燦爛たる群星の在る

それは暗い星をせめ天伴か

ハイエナウのやうな影をかりたし

天空にくついで遊行す

そのやうなわかれ地味は若干暗くせらるるのか

★

うつくまつてゐるハイエナを知つてゐるか

彼等は仇の毒をもつてゐる

そして仇の毒をばらばらつてゐる

弱い獲物は血で死ぬ

彼等も口をきけて我れこそ

その口ははうす紅い

—それを俺は承へ肉愛して来たものだ

芳ばしい微風か世帯の雲をひく

その奥で我れがいつまでも残る

世界はそれ方かもしつと羨しい。

★ エロスなせいぐる

無つ花果のせしめはし枝の肉に

その茂つた草のまへ

太陽の照らすれたる竹と菖蒲の花

朝露のひびくすれを羨しぬかつたが

子供たちを折る時とさつと草せんぬ。

★

（鳥）

上の道とやくとき下の道でさういふ鳥

本々か花ひ茂つたので

その~~葉~~葉の緑いろの皮膚ををんまみつたが

いまにして思へばしみじみと惜しむ。

また

年中つて病床にまぐとき

—老れた人肉は口の由をさかめから

その鳥は天使にまゐつて

空の蒼蒼い雲をかかろう

室ではる竹か繪師と。

五月十一日

線の鸚鵡

堅しい山を城をなすわが心を

あの秘密を力強い感情が

あの陥すのは易い

その女の姫は奴隷となり

敵國の王の隣房の一人となす

柘榴や巴旦杏咲く園に

捕虜の我を邂逅したとき

もはや彼世はわがものではない。

そんな清き癖がわかれ

貴族社会には思われ難いのかた

★

やはらしい樹木つ葉の柔しい友に

わが五月は来

仰いで夜宿しうすう泣きか

一夜こわが年を廻つてぬた

そしてわたしの中をわが鳥が一羽とんびしまつた。

★

逝つた余のみ~~魂~~の心は徒に

上あらしまよます。

それは予定された 市女路の軌道通り。

あすのくすんか銀の時を

おれはこれなる~~心~~の心だ

そのまが心臓には何となく沈黙劑となることかた

戸外では、土の心臓の外一杯の硫黄の香がする。

★

灯はゆれる、翳らなくて。

悲しい圃まあきた翳る

四辻には花が咲く

こめひやん 弾丸の跡がある男

その人は俺のおおしをくねん

俺は眠る

ゆれる 灯はゆずらなくて。

★ 史前

鹿や 幹や 猪や

凡てハイエナの 族を狩りし

入江には 花のまつ白で

舟から 飛い下りるとき

貝殻の 響きをきくとき

★

渺々たる 水は流るる

銀色に けしき 無限の 林を 見れば

赤系統の 色を えては 獲

線では 休む

蒼蒼と 眠る

時にか 手を 止む 獣を 馴した

その 胸は ゆたやん 細々と

かくも んは 眠る

〇〇の 手は ちり 曲がて

★

叫喚する 我 孫子の 心

かゝ 阿夫里の まて 圃や

草を 咲かす 枝の しもの けしき

ハイエナの 族 北の 族を 殲く

★

粟鼠の 月の 夜 鐘を 鳴らす

木枯の 中を 院まは 酔つて 帰る

翌朝 早く 起きた 俺は

霜の上 には 雪の 足跡を 見れば

誰か 人か 誰か 知る べからず。

★ 佛×南×英戦争

海から 青銅の 大砲が 上った

それは 西暦一八二〇年の 鏡造り

弗羅曼の 名一匹が 手に入つた ものである

軍國は 冷たい 氷を 向いた。

★ 令北の 領

瘦せし 陸の 地中を ゆく その

脊椎骨を 数へる のは

一輪 咲いた 高根の花

両腕が ちかま 来た 帷を かく

病室に いらし くの 口を 白はせし。

★ 中島 繁次郎 氏 (二首)

五月 雨の 櫻 櫻の 咲く 頃

花は 咲く まるく 青き 花の 花

櫻の 花の 咲く 頃 海

五月十五日

①
樟樹の葉がなまじく華やかで
卯の夜は垣根の海がうらやま

樟樹の葉がなまじく華やかで

わが館を金でふちとらう

上は溢れるさびしいところ

外の畑はあまがはなをい

とまてぬもの

夕の夕の夕の外は外は

もしもし、柳の風

柳の風

銅の鳥居とくやしやんせ

柳干塔とくやしやんせ

(取巻は暖いよさをやめて)

まいたらば手をとらず。——白女(柳の風信話)

教壇は柄は眼鏡をこら出す

夕の夕の下で馬が倒れこめ

アカシア

せの子はちや見上げて通る

石橋の下は川でま

土遠くで眩い層根がある

星をたききせ

プラトンか見た妻人草子の林は
リクランテス
の死後彼の旅行のつま

金の目

五月十八日 浪中の嶋を今や

五月二十三日

かましく敷物はつら丘陵は遠い、来る刈草は短く、雪は

空に鳥の羽をする、風が得て来らず、土は眩い

僕らは哀れな建帽子をきこり中か曲る

道かくもくぬしぬる、蚊が先れる、よち遠い丘陵を

熱帯のやがたがこころの帽子をかか

直ぐ珠いろん山々かえる、ちやちやと眼の中注ぐ

風の波、芝の波、まるいやつとまた又のやうに鳴る

僕らたましはらう、千後か

鐘が鳴る、鐘が鳴る、女ははを

六月一日

おれは遠く埃の噴泉を見る

矢車草の色彩の混現

野草の白い花をついて、野草

白い道の上をよき、蜘蛛の子

おれはこころを愛し

南側の花を愛する

なせかしらん泣いてゐるといふ

おれは手紙を書く、船が折れるまで

おれはあちのちの家を建てよう

下町の松橋のキープから押し出される

終日おれは噴泉を見る

と二三で啼く犬がゐる

書は息がましい

おれが懐きせぬと

岸かとはくでいるか(つてゐる)

山か近い木にやゝ

おれを思ふと海が揺らぐ

うねる波と輝く波と

アトラスの昔懐と日はずむの愛した
すつこの経験かこのまかふと無に帰る
非有の厚子と見ると
神の種子か懸へると祝祭になる。

六月五日 東信三郎園葬とて

良寛詩集

富貴非ま事
神仙不可期
満腹を願足
虚名用何為
一鉢到处携
布囊也相宜
時来寺内側
會與見童期
生涯何所似
騰々且過時

○

五月陽二月初
物色稍新鮮
此頃時針置
得々游市塵
見童忽見我
他世相持来
要我寺内出
携我步邊々

念時や高官にはなれど
神仙になれどと思はれ
餓えさせぬはそれ
空しく名前をほし
いこやくいし針を一つ
布の重さは米を入る
時々寺内の側へ来て
子供たちと会つて遊んで
「はれはれ」
二の丸上の女の子は
あらうらとしばしば
春は二月の日は
草木のやしあせ
針を一つ
得意なと昔いゆ
子供たちかあを
ふろこびさつて
寺のけしき
あれは

放意白の上
掛席を掃
于此打毬子
我打渠且歌
我歌彼打之
不知時刻
行人歸我吟
因何如斯
低頭不應伊
道得也何似
要知箇中意
えま祇這是
おれは思ふに
とこ野のこ
オニの坪
あすこ
白ちり
見の
妻の
就中
書文
まは

放意白の上
掛席を掃
于此打毬子
我打渠且歌
我歌彼打之
不知時刻
行人歸我吟
因何如斯
低頭不應伊
道得也何似
要知箇中意
えま祇這是

とこ野のこ
オニの坪
あすこ
白ちり
見の
妻の
就中
書文
まは

おれは思ふに
とこ野のこ
オニの坪
あすこ
白ちり
見の
妻の
就中
書文
まは

おれは思ふに
とこ野のこ
オニの坪
あすこ
白ちり
見の
妻の
就中
書文
まは

牡丹草を念ふ牡丹の大々

雪か、彼のり上層のまきまきしてゐる

早く蟬の啼きこゝろ

遠く木で

書き星か山の上には

★

みささきのほらいふあつちのちかやうなが、^{あつち}あつちのまきまき

★

彼等はあつち

テラスにいつて

夫人にいつて

短向した階上とものまはれやい

かりしやの神とともあつち

六月十日

サホテンめ

この蠅とくら(もつち)

このとけのある偏り手だ

x

六月十一日

朝鏡かすると書すおの降る

おれは東の方をさへて決し

西の方を向つて啼きこゝろ

昔いらいれ、あつち

オー、エ、エ、のにはほら、あつち

六月十二日

(砂)

海のまん中に裸の山をみち

鳴か、夜そこに集ると

波か、鞆とゆる根をやす

鳴か、ちはあつちみる、虚空が彼等とあつち

x (砂)

朝にそる長時

海の葎田葎園と

野葉畑をいつち

そこキヤベツ、けかあつち

藍色の、いなる

子供はあつち、あつち

昔、あつち

鳴か、降をまき、彼等の眼をみち

六月十七日

僕は休か、あつち、夜よくあつち

(砂)

山脈は葎青の雲をみち

雨雲の方、靴下をみち

煙は巨人のあつち、あつち

あつち、あつち、あつち

あつち、あつち、あつち

あつち、あつち、あつち

あつち、あつち、あつち

あつち、あつち、あつち

一月二十七日

西川上まで 杉田(申) 杉田(申) 杉田(申) 杉田(申)

歴史 6

低い草むけの先えてぬるみ
大きな骸骨をこいよてぬる
波は彼等を洗つてぬる
荒天は煙つてぬる
昔そこい荷商人の船かあつた
天の廟から老人が遺物をとち出し
われは流印料を要求した

歴史 7

帰仁侯はいつ二行つた
高帝は？ 彼の位を授けなが
今家は回帰くと衣冠だけ
祁連山を巡るゆふと
昔年ばを記し
白髪の人かその計教をいれた

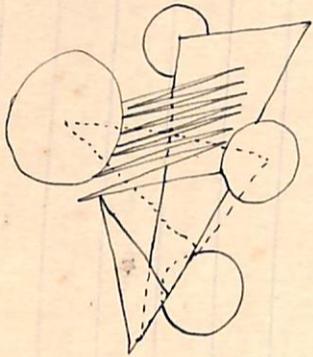
一月二十七日

時向

船の流木あちこのそとに

おれは山名や玉やすつて不意のそのを愛す
女の 髪を
おれと伸なくてぬる天地がある

反映



鷗は波をうたがひ
波を嘯らうとした
波は歯をかみして彼を喰ひし
鷗はあそびに遊ぶうすなうした

七月九日

あと三ヶ月也

ゆき子

雲は氷が
それは夏射して紅い
おれは溜えて夕を延ぶ
輝は暗く

夏の輝は青葉の舞ふ

★まち

エトルリア人はアリア人種を
けおまへん位をいれをえ
埃お立ち音楽か遠い
革命をい絶えし
己は中々の教師か
人毎い一とせといふから

七月九日

ゆき子

己は遺書をかきぬは
たといはこの堆積か
死を告げしは凡そ
白ゆい妻のい任すきは
己は遺書をかきぬは
たといはこの堆積か
死を告げしは凡そ
白ゆい妻のい任すきは

凡ゆる可らぬを餘城の思惟は
後悔し帰す一す
死まひ十日間を苦しみし

詩ん

なましろは一しな
世界は混死し

この世界の革命の起る

大洪水のまきあつて

絶對絶人なる信じゆはならぬ

小庭の春をこめ

残骸ははたそかかせ

いといとよしう寂しう

七月三十一日

夏は猫の髓に合はす

俺は腹を立つ

葉花 莖

詩にならぬ

七月三十一日

本江宮先生を詠

嬖人官制

なつまに合は入る世のいづく

俺は俺の己を守りて

すつて抑制干渉を

にんちさう向は耐え

口外すととめい
いつかこの世の人命を失ふそかあつて

x

雲や花や木々を一歌よま

清木世の書きたると草ま

高嶺はわたつた後かま

人情を俺は知らぬ

非人情の御い先れたからん

x 女のめ

夏は犬を狂はせ水につまみとす

いまちれしまのれと見え

子供らお泳ぐ一狂つておやん

われはお博き水面をすめ

いとはわたり合え道つとよとあらん

x

おんの子をとちす妻よ

またあれば目十俺は命を失はせ

留古不留命、留命不留古

夫木氏のうまさはいま報らて受ける

俺かららるるやうにあらうしものぞ

x

船舳なりいま救ふとすいおは

父母なり 御に泣けるは

飛城なり 真然推し隊つら

死人なり 止めてあまをし百穴より血を吐せ

x

本日も本が後、庭の音つてぬち

郁りとして聲の夜をひ

村のそんまの夜嫁が来た

赤や本の本はをいて枯れこつた

俺は流れて見、丘を見

破瓦を見て嘆く

俺の^の花嫁のまめ期いめくらあはせたいこと。

x

彼はうさぎ、何でしか、種いさ

八月の夕熱、汗を流して

筆と了指か、汗か

ふといと彼を熱情の活人と呼ぶ

x

おれはらるゝぬこの雨を吹く

海豚よ、来い、群れ

おれは急いでばなれと去る

正しん

おれは^の海豚のいそいで、穴の隅に

おれはせむ方なく由と止め

一所を^の海豚を呼んで

いまは^の海豚を呼んで

おれは^の海豚を呼んで

いまは^の海豚を呼んで

dann kommt tiefe Zweifel.

七月二十八

青い川を流れて立って流れて

村がある村がある

おれは何を見ても友人を考へ

雑草の中で、草の腐れぬち

大野の中に何も無いものは

ぬるい花園を、悲しくと暮らす

それを弟に手は網でもる追かけ

止めよ止めよ

おまの不法の標本を箱のぬち

* a r t e n s e r i e

俺のなす事はすつて喜劇に

俺のなす事はすつて喜劇に

俺のなす事はすつて喜劇に

彼は^の海豚のまげら、他のことを

八月十五日

おれは^の神の座を降

青草の上へと、影は

流す青く雨の白く

夏の日は、数多の、火を

渾天に流らせ

いまは^の音と流す

人懐く懐きはし

八月廿七日

徳と訣別す

さからひ難くわれを誘ふものをも求めたり
わが弱き心のゆるむにこれを外に求めたり

かの海女の青き流り

さゆりこのほの紅き峰なり

わか誘ひには弱かりき

いまして十朝印の世間は知りぬ

ぬなるわれの呼ぶ声の

朝睡の心とく 不知不識われを引ぬりぬ

唐葱の身やしき濁ききと身をなして

あしきなる快き眩暈にわれば細く道を通りし

徳としてわが幸作を認め

(Juditha - Novella)

かくて尚ほわの女せと愛す

昔々の見ぬ かの子 他人と認しくもの云ふと

また死ぬと青く細りて

その度にもれ涙なかしこるあけて泣きたりし

かの女せと認めぬ

昔々の見ぬ 何を認るやらぬ

楽しかりしものか — その世にこそ世のかりしものぞ

x

かの女らしき女

徳せはその世をまよめてころかしめるなり

わかれは自身の薄き花毛の口もわかれに刺らざりき

わかれは髪を汗くさく纏身汗と脂の臭い息を吐き

わかれの世はわかれ、わかれの帽子は飾をなく

わかれの世はわかれ、わかれの帽子は飾をなく

わかれの世はわかれ、わかれの帽子は飾をなく

わかれの平世を着るは汚らわしなりき

かくてわかれを愛せむとし

わかれを叱らむる言ふもわかれは愛せむなりき

わかれを愛せむなりき

夫婦としてわかれは堪へべきや

その世にわかれの肌着くさくはほらや

主人のわかれの袂をまとめるころかたさるるや

幼児の袂を袂に渡はあして持てをわかれや

知はる 佐まはる 度敷はる 産はる

新婚幾ヶ月して幸作を改はすや

またその世よりするけるや

わかれこれと 愛せし、しなもこのたらしなをすき

からしなをすき以外で愛せしわかれは

まをすきとしてわかれ、口をわかれ、まをすき

十朝明ヶ山に登る

湯わかしに湯のけはえかへるやうに

しやこしやんと啼く蟬の坂

百合はまが居眠つて首をうつてゐる

木林から冷たい空気が来る

その時 熱い太陽が昇る

あせりの空を空を一面燃えて燃えて

もう空は一面燃えて燃えて

黒い鳥の鳥か — 二羽で飛んでゐる

黒い鳥の鳥か — 二羽で飛んでゐる

黒い鳥の鳥か — 二羽で飛んでゐる

黒い鳥の鳥か — 二羽で飛んでゐる

黒い鳥の鳥か — 二羽で飛んでゐる

秋の風立つ

秋空や青南詔いまだ清し畢へず

。秋の風立つ 水と流るはわかれはわかれ 秋の風立つ

。馬は小蚊のいわゆるも夜や秋気入りぬ

。へやののてなかるるしのを首に感ず

。さむしはわかれは出る本のことき一巨を愛す

。旅のころはてめに一夏休め ちや師

。此の秋は梧桐のりやあまのよまや

。何事か送らむ秋ぞ 穂出づ

。相 穂出づ 穂出づ 穂出づ

。穂出づ 穂出づ 穂出づ

。穂出づ 穂出づ 穂出づ

。穂出づ 穂出づ 穂出づ

八月二十七日 午後一 五時一五

小さい波は立つ

輝くもの

小鳥たちは群れをきつてしまつた

赤い土の上の石があら

おんは影を見る

長い綱の糸をたんと

x

けり輝く青い海と

肉の赤い手を見る

杜物がこつと上へ一層後つてゐる

熱帯の珊瑚よ

陸を造つたものよ

輝くまぶるくはるのしたへりよ

けり青い海の流るるのそとを

x

忘れられたやうに

山下かむらた狭間まで

海かふかく入込んでゐる

けりこゝ手紙を書きた

赤い手の跡をこゝへて見えた

x

たえや海の方へ走る汽車の

ゆれ 七の都の夢を人として懐へら

海風や青き花物や

咲立つ街並をこゝへて見る見たり

旗をたつてゐるのちかく

ゆきこいしき

海沿いの道へ

そこらの空に何の花をまきや

世間は色々の曲を宙で満ち溢し

おりの眼はまらまらと油をかし

木かげの掃子か二脚

おんはちかたうたふんと

はしけやし 君津の海や青波の上はうぼろしきみまみまみ見や

かつしちのまの手にあややをみま子 ~~こゝろしきまみまみまみ~~ 見

海上のうねうねや野は芽つくらなみあておんは遠くつくれる

越後の連なるや野やこころとこころ低きい田あり水はしる見や

ゆるすまて海はやみし海軍のいふし銀いろにゆらゆらす見や

楠の本の本葉いあらとらとらとら月後の崖に松林生ひて

もしちかたの葉や上徳や青海まめくらす野身もま月かかん

鹿野山の雲あたまふき書一箇けぬむわしまはや野原を踏るわ

海ははいすまむしつみいばはらいまはらいまはらとてすうたるわ

八月二十八日

おんは巨大な沼地の太陽を見る

それか地をい反射してゐるのよ

二つの岬の苦しみ

一つは目的をこゝろに見失つた

すへて己れの原野をあら

*

夜よけて蝉か啼く

不安は去らぬのちあらうか

嘯吹か遠い

おんは却つて悲しくみわく

* 花もぬい身は死ぬ

九月二日

誰れも會はず

九月八日 午後五時五分 田村 吉次

九月十日 湯又 夢の 空を 夢

九月十日 湯又 夢の 空を 夢

九月十七日 ヤマノキ

また 自然は 明確な 形が 来る

青い 桔梗の花

鳴らす 釣鐘 草花

その 肌は 自分 だけ

隣り 多い 草花 を見る

世帯 一 として 位 だけ 静かに 死ぬ

山越 かねて 峰の 輪は 射す

朝は ちか

草花 は 田舎

きり きれ きれ きれ

旅 夢 夢 夢 夢

九月二十一日 Zyklen

このあした 大風 吹く 木 倒す 馳け 走り けり

みんこの 人 風 吹く 木 倒す 馳け 走り けり

みんこの 人 風 吹く 木 倒す 馳け 走り けり

みんこの 人 風 吹く 木 倒す 馳け 走り けり

みんこの 人 風 吹く 木 倒す 馳け 走り けり

Der Stern des Bundes S. George

Um dies Werk wirkte ein Miserekenntnis je erklärlicher desto un-
richtiger: der Richter habe statt der entwürfenden Feme auch
auf das Vordergündige gesehen eingelassen ja ein Brevier fast volk-
gültiger Art schaffen wollen. besonders für die Jugend auf dem
Kampft-feldern. Nun ist des Verlauf aber so: der Stern des Bundes
war zuerst gedacht für die Freunde des eignen Reichs und nur die
Erwägung daß ein Vertrogen-halten von einmal ausgesprochenem
heut kaum mehr möglich ist hat die Öffentlichkeit vorgegeben als
den sichersten Schutz. Dann haben die sofort nach erschauen sich
überstürzenden Welt-ereignisse die gewürten auch der weiteren Schichten
empfänglich gemacht für ein Buch das nicht jahrelang ein Geheimnis
Mitte bleiben können. (Vorrede)

Der stets noch Anfang uns und End und Mitte
auf deine Bahn liegenden, Idem der Wende,
bringt unser Preis hinan zu deinem Sterne.
dramale lag weiter dunkel überm Land
der Tempel wachte und des ~~inneren~~ Flamme
Schlag nicht mehr hoch und noch von andern Fiebern
sprachhaft als dem der Väter: nach der Identität
der Starben Leichten unerreichten Grenzen
Wo bestes Blut uns sog die sucht der Ferne ---
da kamst du sprachs aus unserm eignen Stamm
Schön wie kein Bild und greifter wie kein Traum
Im nackten Gang des Gottes uns entgegen:
da triff Erfüllung aus gewirkten Händen
da wand es Licht und alles sehen schwing.

Ich will nicht wer ich bin... nur dies vernimmt;
 Was nicht begann Ich Wort und Tat der Erde
 Was mich zum Menschen macht... nun wagt das Jahr
 In dem ich meine neue Form bestimme.
 Ich wandle mich doch wahr gleiches Wesen
 Ich werde nie wie ihr; schon fiel die Wahl.
 So bringt die frommen Reueige und die Kräfte
 Von ~~stiller~~ Verlehenfahnen von Totenblumen
 Und tragt die reine Flamme vor; lebt wohl!
 Schon ist der Schritt getan auf andre Bahn
 Schon wird ich was ich will. Euch bleibt sein Scheiden
 die Gabe die nur gibt wer ist wie ich;
 Mein Anbruch der euch Mut und Kraft belebe
 Mein Kuß der tief in eure Seelen brenne.

22.11.2
R

建築の建物に射した

銀のサアールが

それは指輪用の閃光

この巨大なサアールの

世紀がその現象する

十四

十代の時代の

十代の時代の

十代の時代の

十代の時代の

十月の月
 十月の月
 十月の月
 十月の月

十月の月 (1)

汝 dein Geiritten o Abenteurer die Wolken gereißet
 dein Sturmwind unheil welt und die besten erschüttert
 Ist da nicht nach klängen zu suchen ein Frevler kennst du?
 > die Hehre Harfe und selbst die spechweidige Leier
 sagt meinen Willen durch steigend und stürzend Zeit
 sagt was unwandelbar ist in der Ordnung der Sterne.
 Und diesen Spruch verschleierte für dich, dass auf Boden
 kein Abstieg kein Heiland wird der mit ertem lausch
 nicht raugt eine Luft erfüllt mit Profeten-murmel
 dem um die Wiege nicht jähert ein Heilengsang.

伊东站の塔

橋のたつ車の遠い... 輪轉印刷機
 都会はすこし巨大なる
 花の... 立直る高層
 傾く大層... 画は...

十月八日 陽田先生の自筆先生

詩

で思は木です

このあたりは木の花か、さる、
緑のうらみか一面にぬて
遠くはらが揺つてゐる、
2

All die Jugend flots dir wie ein Tang
Ein verwachtes Spiel von Horn und Flöte?
→ Horn so lockt ich deine Sonnensöhne,
Menschlich Glücke verwehren ich um dein Lied
Frügte mich der Not des Wandertums
Forachte bis ich dich in ihnen fände.
Tag und nacht hat ich nur dies getan
Seit ich eignen Lebens mich entzune:
Dich geruchst auf Weg und Steg.
3

Da schon Dein Samen den ich trug in Fall
Und aus mir wüchste und ergog in Nöten
Heut unauerottbar grünt: So gib noch dies
Solang ich die ^{in dem} Wüde süßen Licht verweide:
Dass ich die Würde deiner Segnung wadre
Und in der Fremde lot der jünger Preis
Von den Verwehregnen wieder nichts verlaute
Und in des Schwarms getriebe und Gemurle
Dein heiliges Geheimnis neu behüte.

薩瓦には甘薄赤い花かたさかてある
ほのかな光か上品に
今年の菊は世にらさか
娘たちには色か大層おめこめる
戦争よ 錦魚のぬる屋敷
にはたつみの陶器の鶴がある

十月十七日

Baechanial

高原のまき葉の雪にひくは
この家鴨たちの大船隊
水兵の吹きおろすおひに
街ではかたひり甘薄なおひに
親類で一人のやまか
無幸の徳胎を告自した
x

としまのこの街に甘薄

甘薄の店の香ひ午前五時
白の相の早く消える街角
朝日は甘薄の香ひをたてた国旗に

十月二十九日

あつちのこの街に
あつちのこの街に
あつちのこの街に

アはアは青く

アはアは青く

どこから稲妻が来る

陸橋を土庫裏のちから

のこのとちから電車は横切る

x x

おれは芥とまいて下る

一つの島の上陸する

夕焼や曉のいろを見て

向いするの階段を登ると

海と陸と限らなくたのつた

x x

おれは空を飛ぶと持つてゆく

一つの夜

その時北として梅花形の標を

塔の中を待つてゆくものたち

今宵は昔の形の影が彫られてゆく

それと一面の底の影をたたく

x x

塔は都市の上を平をたたく

見えないうちか夕方平をたたく

春はゆく無き者のまはる

微風か通る河川の上で

凡ゆる影が入らまいてゆく

死者の影はたいてゆく

再びこの世に生かされてゆく

x x

この世に生かされてゆく

中央銀行の足踏

寺の妙法蓮華がたたく

肉の味

飯を食うと生きてゆく

十月廿五日

航路

ミモガの生えた島を右に見

たには泥臭い洲がある中を

甘薄い煙を立ち、夕が船はゆく

驚かされた白鳥たちが羽ばたき

その悲鳴の中に白い甘化が散るのを

フアタ・モルガナ

多くの女体柱の従事する鳥の

咲笑か大空からゆく

晴れた

松林ははらうと鳴る

その上にうつつすと棚はく一面

おたの紅い血、そとは山々の紅葉

★ ★ 日本古典の流のたの

キリシヤ人は「事物の正鵠を失したるもの、均正を失したるものを見て不快に感じた。」此の正鵠均正の感じ「いはゆる Kairos の感じが、彼等の文字に於ける中心的な特性となつてゐる。」

「就中彼等は文芸に於ける明瞭性を尊重した、不透明性を装飾品と増して晦渋を厭ふた。彼等の表現法は即物的である。」
「^カー^トが古典の特性として挙げられ、純一性^{アイディヤ}と明確性^{クリヤ}とは正に此のキリシヤ文字の二大特性である。」

イオニヤの海には海賊が泳ぐ

春にサラスの海に春は草が咲く

へラスの人々は青と黄色と

すべこのいろの澄んだしその好む

神はAのまゝ、凡この美に神を觀

酒宴には平を叩き

其儀はは首を垂れぬ。

十の二十

春の春

高い山に登つて俯瞰する

谷に人や馬が群つて

岩や石塊が寒たい眺め

夕暮まで暮して道を下りる

白雲の中に迷つて了る。

建物の頂から寒たい山が見える。

橋を渡れば冬風の風が来る

二つ橋や町には馴染んでゐて

何処にも花を匂ひながらと思ふ

白らんの愛情の情状を世に

黄色い箱の手白ゆを人の贈る女に

この高品質を形用しよ。

十の二十

梅根

紅葉の美しい路を見ると

俺の心は消し難い衝動がある

やがて山々は雪が来るころ

ふつと山々は静まつてゐる

鳥が街道を歩いてゐる

神秘な御向導者

俺は休息をとるころに一年の扉を叩く

白鷺の如く現はれて

手紙を込めて入つていゝころ

この言の純正さはあるか

十の四の午後三時五十分、減るに及ぶ

首を鳳翔歸ら向らせば、夜明けに明滅す。前かて寒山の更をゆる

に登り、屋敷の飲馬屋を傳たり。郊外地底に入り、流水中を流す。

猛虎我が前に立ち、女倉を産み立てては驚く。女は、今秋の花を垂れる

は古車の轆と載く。(女征)

X

日色孤成隱水、鳥啼こゝ城野に満つ。中宿車を駆りて去り、馬に飲み寒
 塘の流れ。露を落として月影を、女を花として雲霧深き。大空の或乾坤の史、
 吾かさ長く悠々たり。(登春州)
 林廻りて峽角をまり、天高くと壁面崩れ。西の風を、木を吹して我れい
 向つて落つ。仰いで車を傾くと看、俯しては坤軸の弱からんを恐る(青陽峽)
 季を日已長、山晚半天赤、蜀道多草花、江尚饒奇石(石櫃閣)
 冬温蚊蚋集、人遠鳥鴨乱、登頓生曾陰、敬傾出高岸(涌泉野南)

朝 花咲く春道を辿り
 夕方ピアノ弾くを聞いと
 蛙うかままん草木が白む
 石がすべて赤く、白い。
 傾いた地塊——日の車は
 左をまつしぐらに駆せ降り
 ちがせ妃のりまはりの花に留まつた

十二月十三日 午後六時四十分 公死す、享年八十四才
 十二月二十三日 著書、中宿の事
 十二月二十七日 中母と話す 破執す
 十二月三十一日 父上す
 一月五日 肥下の宅にて
 一月五日 出さす

一月十五日 中をまと

ヴェネチア

昔 湯色の夜に
 橋辺にわれ佇ん如てぬ
 遠くから歌が来た
 黄舎色の満が
 ぶく(る)水面にわたたりた
 コンドラ、燈火、音楽—
 枝物と薄らゆりに漂ひ出た。

わか心、結曲は
 用いんえゆい感、初して
 こころの歌を秘かに歌ひ出た。
 色あやなま幸福にふるへながら。
 一たれかえん耳を傾けしらうか。……(ニイキエ)

黄舎色の歌
 黄舎色、
 父は戦争で
 お母は火葬場まで、
 火葬色は燃えさつたを。(子供らの魔術)

子供が、こころに泣いてる

こころ、おま
 僕の手の上、僕の手の上
 何ともしやしないよ
 こころ、おま
 何ともしやしないよ
 こころ、おま
 何ともしやしないよ

こころ、おま
 僕の手の上、僕の手の上
 何ともしやしないよ
 こころ、おま
 何ともしやしないよ
 こころ、おま
 何ともしやしないよ

一月十七日

式馬

俺はとぶ

月は已に傾き風が強い

感情が白印あり孤か昏く画せぬ

冷い夜也望て

俺は独り言をいふ

俺はし果てみ生ふ

一月二十日

注文減り市面は満中陰

俺は多くり半島を知りぬる

就中先山と松の守りの多し半島と

二月三日

遠く家々か沈み

桃咲く園や波の澄しや

松風はらゝ

沖から人々を呼ぶ

空宙ははかみし、大は吠え

大現るの噴き水池で

今見る女は

喪服を脱がず

二月十九日朝天満與力町大塩平

八郎屋敷ニありて鉄砲の音ホトク

いふし其の内を 健国寺庭へ飛丸

まより大塩書き 御意敷へ其趣の書

ニ候候処如何にもし不審の事候

早速加藤莊三郎殿大塩屋敷へ目能候

今朝より鉄砲の音いそし如向の事候

候哉と取次を以申入り候大塩より各に

宍原氏候の序に候り 併御官へ

申し 不致の儀不致内此段

御安心にて下貴殿に此方の味方の

御は相成 申事候

無之 宇三郎殿大塩書き早く屋敷ニ立

寄り一統評議をし和田山府申し

申取由堂島御田方へ申来 付

早は御田所官へ馳行 此序一し

甲より馳付候処 東田の子力中

中へ銃砲を筒杯打込大と相成去り

大に同式で車いせせ力中より引去し

大塩の車ハ大満指南へ越へ一の車に

大満中女家の おは市の例西へ行

由堂嶋下候様拾夫よりおはし又みし

車一折登り申し候り候 難波橋迄

より候候候候候候候候候候候候候

二月三日

橋の上で

俺はまたたの影を見る

雨の中川波はゆらぎ

其は咲かぬより

二月三日

遠かき道をまよりの一と雪の中で

赤や青の旗を立て、行旅が行つた

わしは山や谷に分け入り、露を産み、

女はわしの眼の前で開き、鏡山産はす

其のやいゝおぼけて見せし

身はわしは、今迄方々を、御守り候

候は、おぼしき、おぼしき、おぼしき、

此、

突然、おぼしき、おぼしき、おぼしき、

い、一、おぼしき、おぼしき、おぼしき、

月明り、おぼしき、おぼしき、

土人、おぼしき、おぼしき、

い、おぼしき、おぼしき、

神は来ては、おぼしき、

牛 馬 犬 猫

八月東京の事

1. 訪向 - やまふ、山下、松本、西川、川久保、佐佐木、池内、矢野、岡田氏、丸
2. 松浦、悦、遺稿集の件

3. フラシカ著
4. 在洋之族

知人録

× 昭和四十年死亡者 × 不明

× 天野高明

東京市杉並区東田町一丁目四〇

赤川草夫

令 中野区沼袋南三丁目一五 日本印刷学校及

安藤鶴夫

令 本所区五妻橋一丁目一九

浅野健夫

令 市外井神寺町中七三 鷹野村上連登新道七九四二三

× 相澤 等

神奈川県鎌倉市甲村阿久和三四三四

生島栄治

大塚市住吉区五下茶屋三丁目二

× 池田 忠

東京市麹町区紀尾井町九

× 伊东静雄

大阪市西成区松屋通二丁目一五

岩手修藏

東京市市谷区代々木山本町一六一

× 岩佐格二郎

東京市市谷区松井町一八

井上 椿

令 品川区大井原塚町九二八

山名依左一郎

令 世田谷区白金三丁目二四五 塩谷方

池田 徹

令 世田谷区中野区(豊島山長洲)

石山直一

令 京都市左京区中野区(新井南町十一)

及田英成

令 京都市左京区中野区(新井南町十一)

× 藤井敏夫

令 京都市左京区中野区(新井南町十一)

江向幸子

令 京都市左京区中野区(新井南町十一)

大河子偏夫

令 徳島県三好市(中野区)

相野忠雄

令 徳島県三好市(中野区)

岡部長幸

令 目黒区目黒三丁目五四

× 岡田安之助

令 流石区松濤三五

× 大前量三

令 神戸市須磨区力寺町四一三三

大江喜代造

令 兵庫縣武庫郡糟谷町沼草屋

加藤 一

令 静岡縣富士郡岡田町三丁目

川村叙五

令 東京市牛込区七尾町三丁目 伊藤方

中野清見

×西島吉代三郎

×西島清太郎

×西島一興

×西島清一郎

×西島英吉

能勢正元

林正茂

和田明

服部正己

香山行吉

×橋本勇

原武雄

旗田山總

反田運治

×肥下恒夫

×福田一男

船越幸平

藤田久一

古谷綱武

×原右老一

原政美

牛田茂克

本位田昇

大塚市住吉区西島三三三
神奈川縣相模原市西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島一三三
大塚市住吉区西島一三三
大塚市住吉区西島一三三

大塚市住吉区西島九四
大塚市住吉区西島九四
大塚市住吉区西島九四

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三
大塚市住吉区西島三三三

依二七四

×松原実

丸三郎

×金田忠造

松本善海

増田忠

松浦一

松本一孝

×松下武雄

×三好信子

×三島中

三浦治

村上菊一郎

村田幸三郎

村山 喜

室 清

×石田宗治

×森本 孝

森中 篤美

山本信雄

山田 雅夫

山本治雄

保田幸三郎

山口 祥夫

×山崎清一

佐川正作

吉田金一

山打西之助

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三
大塚市住吉区旭町一三三

× 寺川 四古 大沼 牛 河 坂 郡 布 旗 町 新 長 三 一 八

× 和田 清 東 京 市 世 田 谷 区 代 田 古 五 三 一

× 八木 方 子 東 京 市 文 京 区 龜 友 西 古 丁 目 一 二 四 方

直野 宗

池田 繁一 本 郷 区 向 下 國 際 七 町 五 五 館 内

× 原 田 重 雄

梅 本 吉 之 助 宮 崎 縣 延 岡 郡 鏡 野 町

川 崎 菅 雄

× 田 村 三 郎

佐 野 博 夫

横 山 重 三

~~市 本 綱 武~~

